

虹の架け橋の向こうに

奨励	安部 勉【あべ・つとむ】
奨励者紹介	ヴォーリス記念病院チャプレン

わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。

(ローマの信徒への手紙 8章38—39節)

旅立ちの時

「先に旅立った愛する動物は、主人が来るまで虹のたもとで待ち、そして主人と共にその虹の架け橋を渡って天国に行くのです」。これは私の妻が亡くなった時に、葬儀で牧師が語られたエピソードです。私の場合は19年共に過ごした猫が先に旅立ちました。そして翌年、妻が旅立ちました。葬儀での牧師のエピソードは、妻が待っている猫と共にこの虹の架け橋を渡って笑顔で天国に行ったことが、まるで目の前に絵に描いたようにしっかりと私の心に焼き付けられました。そのエピソードが自分の慰めとして、心に刻まれています。

妻と歩んだ日々

私が牧師としての歩みを始めた時に、妻との生活が始まりました。妻はその半年後に体調を崩し、その病と共に歩んでいたように思います。そして年が明け、1995年1月17日、私は西宮で被災しました。牧師となって半年で妻が病を得、そして1年もたたないうちに震災に遭い、牧師としての働きがままならないなか、自分自身がその場に牧師として立ち続けることへの不安や恐れ、そして諦め、誰もが思うであろう「なぜ私が」という思いに苛まれたことがありました。20年近い病と折り合いをつけながら、時に苦しみ、痛みを覚え、もちろん健やかな時も尊い思い出をつくりながら過ごしたあたりまえの日々。苦しみは乗り越えられるものなのだと思っていましたが、2年前に彼女は旅立っていきました。

失っていくこと

私は今、ヴォーリス記念病院で病院の牧師、チャプレンとしての働きをしています。患者さんと出会い、その患者さんのご家族との出会いを通して、「命に向き合うことはどういうことか」を日々教えられます。命を見つめ、死を見つめていました。そのようななかであって、妻が旅立っていきました。それは日々の経験とは違った出来事として、一人の愛する者が旅立った家族として多くの悲しみを得ました。冷静に受け止めることもできないことがありました。そのような現実の中で、後悔、悲しみ、辛さ、寂しさ。これらの思いが全く感じない時もあれば、大波のように襲いかかってくるようなことが、今も続いているのです。

私たちは生きていくうえで、何かを失っていくという経験をしていきます。そして失っていくことで、多くの傷を負うことになります。何かを失う。それは愛する家族を失うだけに限らず、例えば、元気な者の体力が弱っていくこと、能力が衰えていくこと、知性が徐々に失われていくこと、また、離婚や愛する人との別れなど、多くの失うことを経験することがあります。そのような経験は、自分自身の人生すら見失ってしまうほどの大きな痛手として、その人に襲いかかります。病院の中で愛する者との別れに立ち会うことがあります。その思いや気持ちは、決してひと言では語れない思いに包まれています。語ることも悲しみがよみがえることがあります。しかし、その思いはどうしたら受け止めてもらえるのか。分かってもらえるのか。中には悲しみを、苦しみを誰にも語らずに一人、胸の中に抱えている方もいるのではないのでしょうか。

グリーフケア

皆さんは「グリーフケア」という言葉をご存知でしょうか。「グリーフ」という言葉は、日本語にすると「悲嘆」という言葉で訳されることがあります。悲しみ、嘆きです。21年前の阪神・淡路大震災で多くの方が命を奪われた時、心のケアの重要性というのが、社会の中で言われるようになりました。家族を失った、また、健康を失った、自信を失った一人ひとりの喪失感に、失われた思いにかかわることが大切な、重要なことなのだと社会的に広まったと言ってもいいと思います。言い方を変えるならば、私たちの悲しみや痛み、辛さとは、慰められるべきなのだ、ということです。そんなことを忘れて「頑張れ」とか「誰もがそういう経験をするのだから、あなただけが悲しいのではない」と言って励まし、強めることが求められているのではなく、誰もが慰めと、そして優しさを受けること、それが私たち人間として尊いことなのです。

悲しみ

私自身がそのような働き、そのような出会いのなかにおいて、私自身もまた、その悲しみと喪失感を自らのこととして経験することになりました。改めて愛する者が旅立ったということとで、自分の人生を大きく見つめ直す時となりました。そして私自身が新たな人生を生きるのだと思うようになりました。それは自分自身が、これからまた本当に幸せに生きることが求められている。いや、幸せに生きることが、旅立っていった者が願っていることなのだと思うようになりました。それは決して過去を忘れることでも、無理に前向きに生きることでもありません。

批評家の若松英輔という人がいます。彼はこう言っています。「悲しみこそがつながっている証だ」と。愛する者を失った悲しみ。しかし悲しみがあるからこそ、その人とのつながりがある。悲しみとしてその人の中にある。だから悲しむことをもっと尊ぶべきだ。もっと大切にすることだと私たちに訴えかけています。死者を思う時、誰もが悲しみが募るでしょう。しかし、もしその悲しみを思い出すことができなかったならば、その人とのつながりも薄れていくような、そんな思いがします。ならばその悲しみというものを、慈しまたいと思います。そしてその思いを大事にしたいと思います。

支えられている

妻の旅立ちから1年半という月日が経ちました。今こうして皆さんの前で語れること。それは決して私が強いからとか、私が乗り越えてきたからではないと思います。同じ経験をした人の中には、1年半という月日はまだまだ深い傷の中にあって、癒され、慰めを必要としている方が大勢いらっしゃるのを知っています。でもどうして私が今、こうして立ていられるのか。神によって支えられている。後ろに倒れても大丈夫なのだというその安心によって、支えられてきたのだと思います。牧師が言うのでもちょっと説教っぽくなりますが、私自身がこうして立ていられるのは、私がどのように悲しみ、嘆き、本当に自分自身を見失ったとしても、なお支えてくださる、慰めてくださる、「そのままでもいいのだ」と言ってくださる方がおられる。そのような信仰が、改めてその時、自分の中にあることに気づかされました。

神と共に今

そして永遠の命。天に旅立った家族は、今この時も生きている。永遠の命を生きている。これは絵空事ではなく、生き生きと今この時も神と共に生きている。愛する家族と愛するペットと生きている。それが私にとって、よりリアルに希望となっていることを思います。それはある意味、妻が旅立ったからこそ、はっきりと永遠の命が本当に自らの希望となったと、言い換えてもいいでしょう。天にある者、先に旅立った者は、生き続ける死者であります。そして天にあって一人ひとは、今ここにいる私たち一人ひとりの人生を守り、支え、そして励まして私たちと共に歩む。そのような生き方を神の前でしているのだと私は信じます。

生も死も

今日、読んでくださった聖書のパウロの言葉。ひと言で言うならば、「すべては主の御手の内にあるのだ」とパウロは私たちに言っています。生も死も神の前にあって命あるもの。それらは皆、愛されるものとしてある。そして慰めを受けるものとしてあるのだと。私たちはいづれ記憶も肉体も衰え、朽ち果てるかのような死の器へと還っていきます。しかし、主は私たちを永遠の命へといざなうのです。そして復活を通し、命が永遠であること、すべて愛と自由が成就するのだと、私たちに示してくださいました。

慰め

悲嘆、悲しみ、辛さ、寂しさ、それらは皆、癒されるべきものです。慰めを受けることが大切なことです。そして愛おしく包み込むことが大切です。私たちは誰もが破れを感じる弱い、小さな者です。私たちは皆一人ひとりが、神さまの、そして神さまが遣わされた一人ひとりの愛と、労わりの言葉によって慰めを受けること、優しくされることが求められています。そして神さまは、それでいいのだと、私たちに示してくださいました。私たち一人ひとり、それぞれの人生の只中に、多くの出来事に出会っていくでしょう。どうか皆さん、一人ひとりが本当に悲しみや辛さのなかにあった時に、その悲しみを、辛さを尊いこととして受けとめてください。そしてそれらが慰めを受け、癒しを受け、そしてまたそれが人と人とのつながりにおいて、尊いこととして意味がある。そして希望へと変えられるものである。どうか、いつか皆さんにそのような出会いが与えられると信じて、歩いていただきたいと願っています。試練や悲しみ、苦しみの只中に、神もない、希望も見出せないのが私たちの自然な思いです。しかし、そのなかであって、あなたを覚え、あなたを支え、あなたに寄り添う方がおられます。そしてその出会いのなかに、私たちは新たな希望と新たな人生の旅立ちが示されること。どうか今日その御言葉が皆さんの心の中に留まりますようにと祈ります。